

はしがき

本年（二〇二六年）は、江戸時代の寛永三（一六二六）年に後水尾天皇が二条城に行幸してから四〇〇年目にあたり、京都ではこの年末に盛大な行幸行列の再現を試みる行事も予定されている。本書は華麗な行幸の全貌を明らかにするとともに、寛永三年という時期に、このような二条城行幸が何ゆえに行われたのか、二条城行幸とはそもそも何であるのか、その歴史的意義を明らかにすることを課題としている。

またこの二条城行幸に合わせて、家康による創建時の二条城は大改修され、現在見られるような本丸と二の丸からなる環郭式城郭としての形を整えた。本書は、寛永行幸の歴史的意義を明らかにするとともに、行幸に合わせて改修された二条城そのものの城郭史的特質を説明することも主題とする。

寛永二条城行幸に関する類書に対する本書の独自性を挙げるならば、次の点にある。

徳川幕府は、そもそも何ゆえに莫大な費用を投じて華麗盛大な行幸を挙行する必要があったのか。類書および既往の研究は、この点について曖昧なままである。江戸時代の朝幕関係といえ、幕府は「禁中并公家諸法度」などによって天皇と朝廷を統制し、また本書においても取

り上げる紫衣事件に代表されるように、天皇の寺院住持職任命権を弾圧し剝奪してきたという歴史像が示されてきたのである。

このような通念の中にあつて、二条城行幸は、いかにも座りの悪いものであり、従来の歴史学においては素通りするか、注記や付記の形でその事実のみを記すにとどまっていた。あるいは、天皇を自己の居城である二条城に呼び寄せることで、将軍の権勢の高さを誇示するものであつたといった解釈もなされてきた。

これに対して本書では、統制と抑圧という従来の朝幕関係像ではなく、幕府の朝廷政策の基本が、徳川の血を引く天皇を立てるといふ外戚がいせき戦略にあつたことを明らかにし、そのような歴史認識の下に二条城行幸を捉えていくものである。

このような認識は、拙著『近世の朝廷と武家政権』（ミネルヴァ書房、二〇二五年）の中で明らかにし、またそれに基づいて制作されたNHK歴史番組「英雄たちの選択 作れ！徳川のお天皇 將軍秀忠vs.後水尾天皇」（二〇二六年一月）として放映されたことから一定の認知は得られたものと理解している。

本書では、前掲拙著やテレビ番組では紙幅や放映時間の制限から、充分には描き切れなかつた二条城行幸の全貌を明らかにすることを課題とする。併せて、前掲拙著では不十分に終わつてしまった、二条城行幸に象徴される朝幕蜜月関係が破綻した後の状況、政治的分裂の様相と、その後の歴史的展開についても掘り下げて説明していきたいと思つてゐる。